

A 他の班の案と自分の案を比べて

自分の班の案と他の班の案には、課題の捉え方や解決方法に違いがありました。自分の班では、地方都市における交通問題の根本的な原因を「車依存の社会構造」にあると考えました。高齢化が進む中で公共交通機関が使われなくなり、さらに車依存のデメリットが十分に知られていない点を課題として挙げました。そのため、解決策としては、公共交通機関を利用することで得られるメリットや、車を使い続けることによる損失を体験的に伝えることを重視しました。特典の付与やイベントの開催、高齢者向け定期券の販売など、行動を変えるきっかけづくりに重点を置いています。

一方で、「事故ゼロの街」を目指した班の案では、車社会そのものではなく、交通事故の深刻さに焦点を当てていました。特に事故の「数」よりも「重さ」に注目し、高齢者の事故や不注意を減らすことを課題としています。解決策としては、道路を光らせるなど、文字を読まなくても直感的に危険が分かる視覚的な工夫を提案しており、環境整備によって安全性を高めようとする点が特徴的でした。

また、仮想通貨の視点から交通を考えた班では、免許返納後の生活の不便さや公共交通機関の少なさを問題として捉えていました。自分の班が「意識や行動の変化」に着目しているのに対し、この班は「仕組みづくり」に重点を置いています。バスの利用によって仮想通貨を付与し、それを商店街や交通に再利用する循環型の仕組みを提案しており、交通問題とまちの活性化を同時に解決しようとしている点が特徴です。

このように、自分の班は人々の意識や体験を通じて車依存を見直すことを目的としているのに対し、他の班は安全対策や新しい技術・仕組みを用いたアプローチを重視しており、それぞれ異なる視点から交通問題に取り組んでいる点に違いがあると感じました。

B 他の班の案を踏まえて自分の案を再考察

本講義を通して、地方都市における交通問題について各班から多様な視点の提案が示されました。それらを比較・検討することで、自分たちの班の案をより現実的で効果的なものへと改善できると考え、他の班の良い点を取り入れながら再構築を行いました。

自分たちの班では、地方都市に共通する大きな課題として「車依存の車社会」を挙げました。高齢化が進む中で、車を運転できる人とできない人の移動格差が広がっている一方、公共交通機関は十分に活用されていません。その背景には、公共交通機関の利便性が低いという問題だけでなく、車依存によるデメリットが住民に十分認識されていないことがあると考えました。そこで、公共交通機関を利用することで得られる「得」と、車に依存し続けることによる「損」を体験的に伝えることを解決策の中心に据えました。

しかし、他の班の発表を聞く中で、自分たちの案は「利用促進」に重点を置く一方で、「安全性」や「仕組みとしての持続性」という点がやや弱いことに気づきました。例えば、「事故ゼロの街」を目指した班の案では、交通事故の数だけでなく、その深刻さに注目し、高齢者や歩行者の安全確保を重視していました。特に、道路を光らせるなど、文字を読まなくても危険が直感的に伝わる視覚的な工夫は、高齢者や子どもにも分かりやすく、有効な対策だと感じました。

この視点を自分たちの案に取り入れることで、公共交通機関の利用促進を「安全な移動手段の選択」という意味づけで強化できると考えました。車に乗らないことは単なる我慢ではなく、事故リスクを減らし、安心して暮らせる選択であることを示すことで、住民の行動変容につながりやすくなると考えられます。

さらに、仮想通貨の視点から交通問題を捉えた班の案からは、インセンティブを一時的な特典に終わらせず、地域内で循環させる仕組みの重要性を学びました。自分たちの班でも、公共交通機関の利用者に特典を付与することを考えていましたが、それをポイントや地域通貨として商店街やイベントと連動させることで、継続的な利用と地域活性化の両立が可能になると感じました。

これらの学びを踏まえて再構築した自分たちの班の案では、「公共交通機関の利用促進」「交通事故の減少」「地域の活性化」という三つの目標を同時に達成することを目指します。具体的には、公共交通機関を利用することで地域ポイントを付与し、そのポイントを商店街や地域イベントで使用できるようにします。また、高齢者向けには定期券やICカードを活用し、操作の簡略化や負担軽減を図ります。加えて、事故が起りやすい場所では視覚的な注意喚起を行い、安全な移動環境を整備します。

このように、他の班の案の良い点を取り入れることで、自分たちの提案は単なる交通利用の促進策から、安全性や地域づくりまで含めた総合的な交通政策へと発展しました。交通問題は単独で解決できるものではなく、高齢化、経済、地域コミュニティと密接に関わっていることを改めて実感しました。今回の再構築を通して、複数の視点

を組み合わせることの重要性と、住民の立場に立った持続可能な仕組みづくりの必要性を強く感じました。